えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第103号
平成30年
(2018)
5 − 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸の「とき」と庶民のくらし……1〜2
見学会「都内で一番古く、充実した“谷中七福神”をめぐる！」……3
えど友広小路……4〜5
会員からの投稿「神田明神の祭神について」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
『えど友』100号記念投稿「東京風景いまむかし」「昭和20年代後半の浅草興行街・国際劇場と瓢箪池」／「都電の乗換券」……6
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪―その18」……7
学習会「すみだ郷土文化資料館を訪ねる」……8
第18回定期総会開催のご案内……8
えど東京一景(10)－東博のユリノキー……9
江戸博クリップ「派遣の仕事から美術館・博物館の仕事へ」……9
江戸名所図会を歩く…㊲［医光山円照寺から明王山宝仙寺］……10
えどはく探訪「団地と電化生活」……11
催事案内……12

江戸の「とき」と庶民のくらし

時計業界では時計の文字盤のことを「エト」ということがあるそうです。和時計の文字盤に干支が描かれていることからきていることに思い当たり、江戸時代の時計師たちが「エト」と呼び、現代の時計技術者にそれが受け継がれたのだろうと想像すると、なんとなくロマンを感じるのは筆者だけでしょうか。

江戸市中どこでも聞こえた「時の鐘」

和時計は江戸時代の不定時法に対応した日本独自の機械式時計です。文字盤表記は1日を12等分して一刻(いっとき)とし、それぞれに十二支が当てられています。また、四から九の六つの漢数字も振られています。この漢数字は時刻を知らせる「時の鐘」が撞かれた回数です。撞き始めを気付かせるために捨て鐘を3回撞き、そのあとの時報として4回から9回撞いたというわけです。

芭蕉の句に「花の雲　鐘は上野か浅草か」と詠まれたように、江戸の町のどこでも鐘の音が聞こえたのでしょう。時計が普及していない時代、人々は「時の鐘」が撞かれることでおおよその時刻を知ることができました。江戸で最も古いのが日本橋石町(こくちょう)の鐘で、現在は東京メトロ小伝馬町駅そばの十思(じっし)公園に移築されています。

この鐘は2代将軍秀忠の時代に江戸城西の丸で撞かれていましたが、御座の近くでは差し障りがあるため、城内では太鼓で時報を告げるようになり、日本橋石町に鐘楼堂を造って移したのです。18世紀の江戸は人口約100万の大都市となり、鐘楼は、日本橋石町、浅草寺、本所横川町、上野大仏下、芝切通、市谷八幡、目白不動、赤坂田町、四谷天竜寺と、9カ所に置かれるようになりました。鐘楼の管理費は町人から集め、大規模な修理などのときには幕府から公金を受け取っていたそうです。

▲十思公園の時の鐘

落語「時そば」が面白いのは

再び、和時計の文字盤に注目しましょう。正午に当たる午(うま)の刻が九つ、一刻ごとに一つずつ数字が小さくなります。夜10時ごろに当たる亥の刻には四つまでに減り、午前0時ごろに当たる子の刻には九つになります。

そばを食べる様子が見どころでもある落語「時そば」はよく知られていますが、鐘の回数が四つの次には九つになることがこの噺を面白くしています。

深夜、ある男がそば屋の屋台で、しっぽく(ちくわそば)を食べ、そば代の16文の料金を支払うのに、そば屋の店主の手のひらに一文銭を1枚ずつ数えながら載せていきます。「一(ひい)、二(ふう)、三(みい)」と、八つまで数えたところで、「今何刻(なんどき)でぇ？」と時刻を尋ねました。店主が「九(ここの)つで」と応える

と、九つを飛ばして十六まで数えて、「ごちそうさん」と１文ごまかして立ち去りました。この様子を陰で見ていた別の男が翌日、昨晩より早い時刻に別のそば屋で同じように勘定を始めます。八つまで数えて「今何刻でぇ？」と聞くと、店主が「四つです」。五つから数えるしかなく、勘定を４文余計に払ってしまいました。最初の男が代金を支払ったのが九つで午前０時ごろ、２番目の男はその一刻前の四つで午後10時ごろだったのです。

不思議な鐘撞きの回数

最初に触れたように四つから九つは鐘を撞く回数ですが、なぜこの回数なのか不思議に思いませんか。調べてみると、中国の陰陽の考え方に関係あるということです。縁起が良いとされる数の九を十二支最初の子の刻に当て、９回鐘を撞くことにしました。次は２番目なので九×２＝18、３番目は九×３＝27、というように６番目まで数えていきます。撞く回数は、４番目以降、36、45、54となります。これでは撞く回数が多すぎてしまいますので、一桁目だけを採って、九、八、七、六、五、四とし、ここで半日終わったのでまた九に戻ることになるのだそうです。この理屈がピンとこないので、10回以上撞くのは大変だから最多９回にして、捨て鐘の３回と区別するために最小４回にしたのかもしれない、などと勝手に推測しています。

▲筆者所有の和時計風置時計

不定時法と庶民

日の出と日没にそれぞれ六つ鐘を撞きました。いわゆる明け六つと暮れ六つですが、鐘が聞こえにくい地域では自分の手が見えるかどうかで判断したそうで、実際と30分ほど誤差があったとか。昼と夜をそれぞれ６等分したのが一刻です。春分と秋分では一刻の長さは同じになりますが、夏と冬で一刻の長さが昼夜で相当違ってきます。江戸の人たちはこの不定時法で行動していましたから、夏は長時間労働、冬は短時間労働となったわけです。庶民は夜明けとともに起き、日没までに夕飯を済ませて床に就いたそうです。「時そば」の男たちは随分夜更かしの人たちということになりますが、これはあくまでも落語創作上のこととして理解いたしましょう。

▲二挺天符式和時計（セイコーミュージアム蔵）

技術と芸術の粋を集めた和時計

大名や多くの豪商は和時計を所持していたようで、お抱えの時計師という人たちが雇われ、季節に応じて一刻の長さを調節、修理や保守に当たっていました。

和時計が昼夜の一刻の長さの違いに対応するために、機械の運転速度を変える方法と、それは変えずに文字盤で調節する方法がありました。まず、前者の速度を制御する櫛歯状の棒、天符（てんぷ）が付いているものがあります。１本のものは一挺（いっちょう）天符といい、２個の分銅が付いていて、明け六つと暮れ六つに分銅の位置を移動させて速さを調節します。天符が２本のものが二挺天符で、明け六つと暮れ六つに昼用と夜用の天符が自動的に切り替わるので、毎日分銅を移動させる手間がかかりません。ただし、15日ごと（二十四節気ごと）にそれぞれの分銅の位置を移動する必要はあったそうです。後者は目盛りを移動させる尺時計などがありますが、東向島のセイコーミュージアムでは様々な和時計を見ることができます。

▲美しい和時計（セイコーミュージアム蔵）

和時計は大名時計とも呼ばれ、豪華で美しい装飾を施されたものが多いようです。特にからくり儀右衛門で知られる田中久重（1799～1881）が制作した万年時鳴鐘（まんねんじめいしょう）には「モノづくり」の神髄を見る思いです。一度ゼンマイを巻きあげれば１年動き続け、不定時法、定時法両方式の時計をはじめ多くの機能を備えています。その上、外装部分も七宝、彫金、蒔絵、など様々な伝統工芸の技が凝らされているのです。国立科学博物館に展示されていますのでその見事さをご覧になりませんか。

▲田中久重の万年時鳴鐘

参考文献：『時計の社会史』吉川弘文館、『和時計図録』セイコーミュージアム、『ふでばこ』23号　DNP アートコミュニケーションズ

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成30年1月7日）

都内で一番古く、充実した“谷中七福神”をめぐる!

強風ながら雲一つない晴天に恵まれ、JR田端駅から七福神を巡りました。七福神巡りは元日から7日、所により10日までの間に七福神を祀る社寺を巡拝、その年の万福招来を祈願する行事です。多くの社寺では御神体が開帳され、御朱印を授与してくれます。

谷中七福神は江戸で最も古く人気のコースで、享和年間(1801～04)に始まったとされ、北区・荒川区・台東区の3区にまたがる寺院だけを回る約3.5kmの行程で約2時間半歩きます。

▲東覚寺のお庭

東覚寺【福禄寿】

谷中七福神の中で福禄寿の参拝を欠くとご利益が薄くなるといわれています。風が強いので、七福神の説明はレジュメにまかせて、坂道を下り右に曲がると山門前の赤いお札大の紙に包まれた金剛力士像(赤紙仁王)一対が見えてきます。入ると正面の本堂に福禄寿が出迎えてくださり、公開されている庭園も鑑賞しました。ここで御朱印用の紙を購入するのが普通ですが、日曜日の昼下がり、混み合うことが予想されるので、甘酒のお接待を受けて出発しました。

▲赤紙仁王

青雲寺【恵美寿】

えびすは普通に書くと恵比寿ですが青雲寺は恵美寿と表記しています。前から来る反対方向の七福神巡りの方々を目印に道を行くと文化・文政(1804～30)のころ、次に行く修性院と明治に廃寺となった妙隆寺を合わせて花見寺と称された青雲寺があります。今は残念ながら、入り口に小さな花見寺と刻した石碑があるのみでその面影はありません。本堂正面に祀られた恵美寿をお参りすることができました。

修性院【布袋尊】

すぐ隣の修性院の布袋尊は重さが200kg近くあり、大きな徳のある姿が有名です。本堂の中に祀られているため、長蛇の列が寺の入り口までつながっていました。すぐにはお参りできそうもないので、詳しい説明を聴くだけにして、塀に描かれた荒川区出身の吉野健一氏によるユーモラスな布袋様を見学しながら次のお寺に向かいました。

▲修性院

天王寺【毘沙門天】

日曜日なので日暮里の夕やけだんだんでは餅つきが開催されていました。御殿坂も日暮里駅まで人でいっぱいです。天王寺の毘沙門天は比叡山飯室谷の円乗院からお迎えしたものです。毘沙門堂のお参りの列も長くなるばかりなので、遠くから手を合わせました。

長安寺【寿老人】

谷中墓地を通り抜け、昭和32年(1957)に焼けた五重塔の跡を見学しました。長安寺の寿老人は徳川家康が納めたといわれ、等身大寄木彫刻で左脇に鹿を従えています。突き当たりの長安寺の小さな門からはお参りの人の列があふれ出ていました。列の途切れた辺りにある功徳林寺には、浮世絵の美女で有名な笠森お仙がいた茶屋があった笠森稲荷があり、お参りしました。

護国院【大黒天】

本来の大黒天は寛永16年(1639)護国院釈迦堂で大坂の陣の戦死者を弔う大念仏法要の際、3代将軍家光より賜った大黒天像の仏画です。今は秘画として後ろの厨子に納められています。お参りの人は多かったのですが、大きなお堂なので本堂に上がってお参りすることができました。たくさんの仏様が鎮座し、お前立ちの大黒天木像をはじめ、すぐそばまで近づいてお参りすることができました。

▲不忍池辯天堂

不忍池辯天堂【弁財天】

上野動物園を横に見ながら、坂を下りると不忍池が見えてきます。やはり辯天堂は参道からごった返していました。本堂は参道までお参りの列が続いていました。辯天堂の弁財天像は秘仏とされ、毎年9月の巳の日に開帳され、それ以外は公開されません。辯天堂の周りの多くの碑やお堂の成り立ちなどの詳しい説明を聴きながら境内を回り、解散しました。　　参加者117人。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

会員からの投稿

神田明神の祭神について

高野祐子

昨年12月『江戸名所図会』輪読会のレポーターを務めて気がついたことがあった。第５巻玉衡之部神田大明神の祭神についてである。図会には「大己貴命、平親王将門霊二座」とあるが神田明神(現在の正式名称)リーフレットには少彦名命が加えられ三座になっている。ここで私は20数年前に「神田明神に平将門命が戻った」という新聞記事を読んだことを思い出した。図会刊行の1836年には祀られていた将門命がいつ外されたのか。リーフレットによるとこうである。「明治７年(1874)茨城県大洗磯前神社より少彦名命をお迎えいたしました。さらに同年明治天皇が親しく参拝なされました。平将門命は明治７年に一時摂社将門神社に遷座されました」。

遷座の理由は何なのか。それは『別巻江戸名所図会事典』(ちくま学芸文庫)にあった。「明治七年祠典を正され、旧来の祀神平親王将門は反逆の臣たるをもってそれを斥遂し摂社に神社を置き，大己貴神ならびに少彦名命を移して本社祀神と改定ありたり」とある。939年天慶の乱で新王を名乗った将門は平安京の朱雀天皇の朝敵であったのだ。当の将門は２カ月後には討たれて首が京の東の市にさらされた。しかし地元常陸では土豪たちに頼りにされ、百姓たちに慕われていたことから祀られることになり、大己貴命と合祀されたのは1309年のことである。社殿は神田橋御門の内にあった柴崎村から駿河台へ、1616年に湯島へと移って来た。その10年後、後水尾天皇から勅願が下り、神田大明神は鎮護国家を祈願する神社として認定されたのであった。徳川幕府が江戸総鎮守としていた神社を受け入れなければならない朝廷の政治的状況があったのだ。ところが明治維新で幕府は消滅、神社側の立場も微妙になったのであろう。1874年明治天皇の参拝計画をうけて、将門が祭神であるのは不敬だと、政府または宮内省から注意があったのか、神社の側が忖度して遷座させてしまったのか知る由もないが、将門を外した空席に急遽少彦名命を迎えて二座としたのではないか。

そしてリーフレットは続く。「その後神職及び氏子総代をはじめとして氏子崇敬者の懇願により、昭和59年(1984)、再び神田明神の三ノ宮ご祭神に複座されました」と。明治・大正・昭和と111年間疎外されていた将門が戻った。昭和もだいぶたってからであるが氏子崇敬者の思いがかなえられたことを私は善しとしたのである。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

２月20日(火)「国立演芸場２月番組中席」の鑑賞を、月番有田友二郎さんの手配で行った。今回は、落語４席と漫才の後に11代目金原亭馬生が「子別れ」(上)を口演し、金原亭世之介と古今亭菊春の獅子舞を挟み、林家正雀の脚本で鹿芝居の「子別れ」(中)(下)を一座が演じた。参加者15人。

３月20日(火)月番小山一成さんによる「桂文珍」のＤＶＤ鑑賞をした。新作で病院の待合室に集う元気な老人たちの姿を描いた「老婆の休日」と、“あの世ツアーへご案内”「地獄八景亡者戯」を鑑賞した。参加者20人。

◆藩史研究会

２月９日(金)武州金沢藩は金沢八景で知られる横浜市金沢区六浦に陣屋を設けた。享保７年(1722)に下野国皆川藩主米倉忠迎が藩主として六浦に移住。ここに金沢藩が立藩。金沢藩祖忠迎から８代昌言まで1.2万石で明治維新を迎える。幕末には２度の長州征伐に出征。横須賀製鉄所の警護なども行ったが最終的には新政府に恭順。明治２年(1869)、加賀(金沢)藩との混同を避けるため六浦藩と改称。参加者13人。

３月２日(金)唐津藩は、肥前国上松浦地方の唐津を中心とする中藩。最初の寺沢氏は秀吉の子飼い武将であったが、その他は譜代大名である。石高は、外様寺沢氏12.3万、以後譜代大久保氏8.3万、大給松平氏７万、土井氏７万、水野氏６万、小笠原氏６万と続いた。小笠原長国は佐賀の鍋島直正に随行して上京し、藩の存続に努め、明治維新を迎えて唐津藩知事となった。参加者13人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

２月８日(木)米屋久右衛門の「日記」を読む。 明治５年５月３日～５月30日。(食用や乳用として牛・羊が輸入され)、犬上県東京出張所は県地(現滋賀県の一部)へ送るため、口附けの者や飼方について田中家へ問い合わせ、そのための宰領も依頼している。また奉公人の一人が初めて髪の毛にハサミを入れる(ザンギリ頭にする)など、田中家にも新しい風潮がうかがわれる。参加者８人。

２月22日(木)明治５年６月１日～６月15日。参加者８人。

３月８日(木)明治５年６月16日～７月９日。(昨年から郵便が始まったが、)川越表へ手紙を出すため郵便役所へ日限を問い合わせたところ、丁日(偶数日)に出発とのこと、毎日ではなかったようである。参加者９人。

３月22日(木)明治５年７月10日～８月16日。参加者６人。

◆『江戸名所図会』輪読会

２月15日(木)中村貞子さんの担当。麟祥院は春日局開基で、元は報恩山天澤寺と称していたが、局の法号にちなんで改名され、局の墓所となった。不忍通りと上野広小路の上野４丁目交差点辺りは不忍池から流れ出る忍川が広小路を横断し、橋が３つ架かっていたため三橋と呼ばれていた。不忍池の中島にある弁天堂は、寛永寺の伽藍の一つ。天海が不忍池を琵琶湖に見立て、中島を竹生島として本尊の八臂弁財天も竹生島の宝厳

寺から勧請した。参加者15人。
３月15日(木)下永博道さんの担当。東叡山寛永寺は後水尾帝の時代、寛永年中に江戸城の鬼門を守るとして比叡山延暦寺に比して天海僧正により創建された。「寛永寺」は広大な寺域全体を指す総称であり、当時、寛永寺という一つの堂宇があったわけではない。黒門から本坊まで全体を描いた挿絵は10頁にも及び、天台宗で最も重要な中堂から始まって竹の台、雲水塔、転輪蔵、法華堂、鐘楼、東照大権現宮、忍岡稲荷、山王大権現社、勧学寮、清水観音堂、常念仏堂などを挿絵で確認しながらの解説があった。参加者14人。

◆日本の大道芸伝承会

２月14日(水)マンネリ化の兆候が見える「江戸の物売りと大道芸」の対応について新演目を披露することとし、「玉すだれ」、「ガマの油売り」に加え、「可愛がって」、「すたすた坊主」などの練習をした。参加者２人。
３月14日(水)発声練習として「外郎売り」と「ガマの油売り」を行い、新演目などを練習した。参加者２人。
３月17日(土)深川江戸資料館主催「江戸の物売りと大道芸」への出演。２回とも百数十人の観客が集まり、皆最後まで熱心に見ていた。参加者２人。
３月28日(水)５月３日(木)に行われる深川江戸資料館との共催「にほんの大道芸と物売り」への出演のための稽古。「可愛がって」と「玉すだれ」などを行った。参加者２人。

◆江戸を語る会

２月24日(土)「江戸の子育て」というテーマで大森美恵子さんが発表した。北山修氏の講演「二者間内交流と二者間外交流：浮世絵のなかの母子関係」を出典に、浮世絵に出てくる多数の母子像から西欧と日本の価値の違いが説明された。参加者６人。

◆かっぽれの会

２月16日付けで解散。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

２月15日(木)東京メトロ竹橋駅に集合、すぐそばの平川門近くにある「太田道灌公追慕之碑」「江戸城築城五百五十年記念の標(しるべ)」〔歴史案内板「まちの記憶」(1457年江戸城築城)〕を見学したあと、歩いて企画展「太田道灌と江戸」を開催中の国立公文書館へ行った。公文書館では、「太田道灌と江戸」展企画担当の千葉さんから展示構成・内容のレクチャーを受け、その後１階展示室を見学して、流れ解散した。参加者は59人。
３月29日(木)東京メトロ神楽坂駅に集合、駅近くの道灌が梅林坂に創建したという正蔵院、道灌が牛込に遷奉したという赤城神社に参拝・見学したあと、牛天神町を経て山吹の里伝説の話もちらつく山吹町の雰囲気を味わい、漱石山房記念館に寄り休憩。松井須磨子のお墓のある多聞院、関孝和の眠る浄輪寺に参拝、市ヶ谷方面へ向かい、途中柳田國男の旧居跡見学。市ヶ谷の亀岡八幡宮は道灌が鶴岡八幡宮から江戸城に勧請したのがもとのところで、道灌の軍配団扇が保存されている。参拝・見学して解散した。参加者50人。
４月１日(日)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者25人。
【訂正】102号のサークルだより「太田道灌ゆかりの地を訪ねる会」１月26日の４行目、「道灌山稲荷社」は「道観山稲荷社」の間違いでした。

◆文士散歩

２月休会。
３月17日(土)「鎌倉文士村を巡る」の２回目を実施。ＪＲ鎌倉駅に集合し鶴岡八幡宮と逆の由比ヶ浜海岸方向に向かう。喧騒から離れた所に八幡宮の元始であった元八幡がひっそりと建っていた。文豪芥川龍之介の旧居もこの隣にあって横須賀に通っていたといわれる。その後、江ノ電由比ヶ浜駅から吉屋信子記念館、鎌倉文学館、川端康成ゆかりの甘縄神明宮を巡り、高徳院の大仏様を拝み、長谷寺を拝観して江ノ電長谷駅からＪＲ鎌倉駅に戻り、解散した。参加者13人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰誌記』

目付の配下として江戸城内の雑務に従事する「五役の者」の職務は幅広く、例えば、諸門の番衛、行列の供奉、詰所付近の防火、物品の運搬、所々の清掃など、いずれも江戸城内の施設維持や物品管理に欠かせないものであった。また、その他に重要な役割の一つとして隠密御用も担っていた。五役の者は、常時・臨時を問わず様々な雑務を担っていた関係から城内のいたる所に出入りが可能であるため、城中の保安上も、彼らが江戸城内に何時ごろ何人いて、何処で作業に従事しているのか、厳格に把握する必要があった。しかし、身分が軽格であり、日々、大勢の人の出入りもあるので把握も難しく、そのため、諸所の出入りは鑑札をもって厳重に管理されていたのである。

友の会めも(開催日と人数)

平成30年２月～３月

◆役員会2月13日(火)13人。3月13日(火)16人。◆事業部会2月6日(火)19人。3月6日(火)20人。◆広報部会2月20日(火)10人。3月20日(火)7人。◆総務部会2月27日(火)17人。3月27日(火)17人。◆古文書講座入門編：2月7日(水)午前81人・午後89人。3月7日(水)午前84人・午後82人。初級編：2月14日(水)午前70人・午後65人。3月14日(水)午前75人・午後61人。中級編：2月24日(土)午前39人・午後32人。3月24日(土)午前40人・午後29人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト2月1日(木)A班7人。B班5人。2月15日(木)A班9人。B班5人。3月1日(木)A班8人。B班4人。3月15日(木)A班8人。B班5人。

カット：
佐藤美代子さん

『えど友』100号記念投稿

「東京風景いまむかし」

昭和20年代後半の浅草興行街・国際劇場と瓢箪池

若松　謙二

これより私が若いころの浅草興行街の様子を紹介していきたい。俗に浅草六区とよばれる一角に、特色のある劇場や映画館・演芸場が活動していた。その興行街のなかで、私が最も好きな映画館は、現在ドン・キホーテが建っている場所にあった「大勝館」である。第二次大戦以前に建築された映画館ではあるが、白亜の堂々とした外観で、最盛期にはゆったりとした厚みのある座席を設置していた。第二次大戦後すぐ、アメリカのモノクロのターザン映画が上映された。単純なストーリーで、ジョニー・ワイズミューラーという映画俳優が主人公であった。パンツ一枚の姿でスクリーンに登場し、時折アーアーアーと大声を上げるだけの内容だったが、観客は2、3時間も時間待ちで行列を作って入場した。今考えると不思議な思いがする。

現在、浅草ビューホテルが建っている場所は、当時東洋一と表現された国際劇場が興行していた。私は、4、5歳の頃から姉に連れられてターキーこと水の江滝子が活躍していた松竹少女歌劇を観ていた。3月10日の空襲で戦災に遭い少しの間休業していたがすぐ再建された。昭和20年代は、川路龍子、小月冴子などが活躍した。私はお嬢さん役の磯野千鳥のファンで、国際劇場の裏口で劇団員が退出するのを楽しみに待っていたときもあった。

他の映画館・劇場など、20館すべてに入場して映画や芝居、演芸を見ている。また、古い写真を見れば、それがどこの劇場か映画館か今でも判別できる。浅草に関わる映画俳優、役者などとは日常的に出会っていた。物日の浅草は、満員の通勤電車のような雑踏であった。

瓢箪池は、昭和26年に埋め立てられた。それまでは、池の周囲に飲食店の葦簀張りやテント張りの小屋が並んでいた。時折、映画女優？の桜むつ子が飲食店の椅子に掛けて、お酒を美味しそうに飲んでいた。彼女は気さくな女性で、通行人が声を掛けると笑顔で応対していた。瓢箪池を埋めたときは、池に大きな鯉が沢山いたが、それがどのように処理されたのか分からない。瓢箪池には藤棚と露台が張り出していて、花の時期にはとても潤いのある情景であった。当時の浅草はそんな街だった。跡地は現在の場外馬券場である。

戦後、中学1年から高校卒業までと、2年ほどのブランクから大学に入った後も、10年間を浅草で過ごした。母が伯母(母の姉)の六区興行街での商売の手伝いをしていたので、毎日、下校時は家に帰らずに伯母の店に通い、時には店番もした。また、中学・高校の同級生の家が、新仲見世通りの近くにあったので、年中その家にもいた。また、或る友人の父親が六区の興行街に顔の利く立場だったので、入場料なしで全ての映画館・劇場に入れてもらった。

興行街と芸能人との関わりを記述すると、何十枚になってしまうので、あとは省略致します。

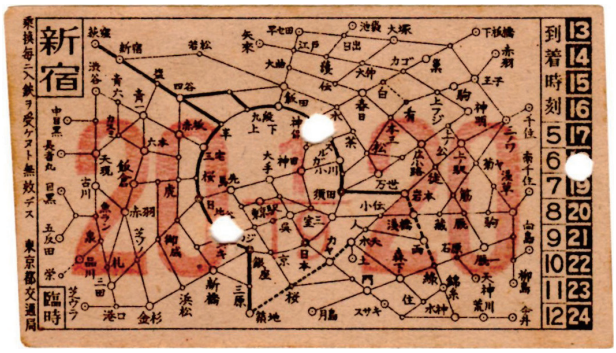
都電の乗換券

井上　孝

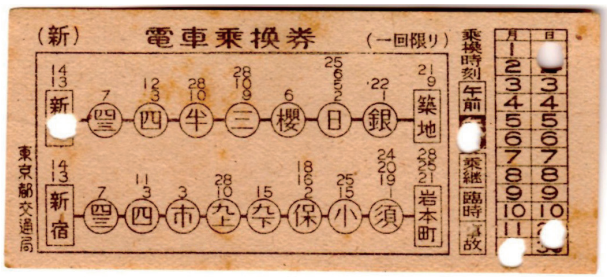
昭和18年6月、都電の運賃が7銭から10銭になった。このときも乗換制度は継続され、1乗車10銭で何回も乗り換えながら、都電が走っている範囲ならどこまででも行くことができた。第1図は、その後、昭和18年10月から使われた乗換券で、表面には路線図と乗換地点が示されている。また、この券はそれぞれの営業所(車庫)が運行している路線を太線で示しているので、どの辺から乗った客かが一目でわかるようになっている。そして乗り換えるごとに鋏を入れるのである。

しかし、この路線図をよく見ると、数寄屋橋～新橋間、東京港口～芝浦間など12カ所にも電車が走っていたことになるが、それらの区間は昭和19年5月に廃止になり、その線路は外されて下板橋から志村までを延長するのに使われた。当時は太平洋戦争中で軍需優先のため鉄材がなく、新しいレールが造れなかったのである。また、そのときから乗換制度も廃止された。

戦後、昭和20年12月に乗換制度が復活したが、そのときは乗換1回限りになり、乗換券も第2図のようになった。停留所名の上の数字は、それぞれの停留所で乗換可能な電車の系統番号である。しかし、乗換制度は長続きせず、昭和21年3月には廃止され、その後、昭和42年には荒川線のほか都電はすべて廃止になった。



▲第1図　都電の乗換券（新宿車庫）昭和19年1月20日



▲第2図　都電の乗換券（新宿車庫）戦後間もない頃

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成30年3月25日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
ーその18（高輪・品川 周辺）ー

青空広がる春の日差しの中、都営浅草線泉岳寺駅Ａ４出口に集合して出発です。

高輪大木戸

駅から左手に、現在は石垣のみを残す高輪大木戸跡が見えます。旧東海道の道幅約６間(約10ｍ)の両側にあったとされる石垣は、現在は片側(海側)に幅5.4ｍ、長さ7.3ｍ、高さ3.6ｍのみ残されています。この木戸から品川方面が「高輪」です。海から眺めると、高台で縄手道(真っ直ぐで長い道)があったことから「高縄手」と呼ばれ、これが転じて「高縄」から「高輪」になったそうです。

▲願生寺前

「高輪うしまち」絵

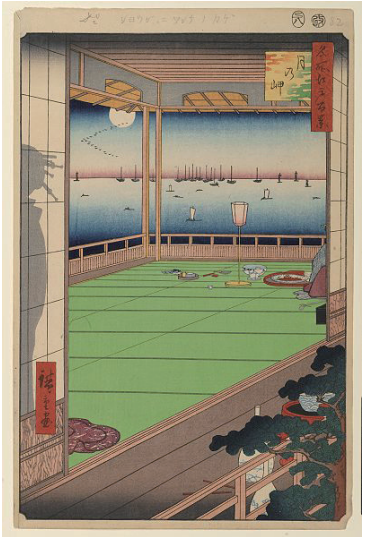
品川方面に第一京浜国道を歩いていくと、当時の車町、俗に「牛町」と呼ばれた地があります。江戸の初期、増上寺造営に呼び寄せられ徴用された牛持人足が土地を与えられ定住していた地です。この周辺には、車置場や牛小屋が建ち並び、多いときは牛が約1000頭もいたとか。慶長７年(1602)に創建された願生寺の牛供養塔が「牛町」の存在を伝えています。現在見える高層ビルに複数に入り組んだ線路網の辺りはすべて海であったとのこと。この地は、海の向こうに房総の山々が眺められる景勝地で、月見の名所でもあったため大勢の人々で賑わう港町でした。

泉岳寺～高輪神社

泉岳寺交差点を右折して坂を登ると、赤穂浪士ゆかりの泉岳寺です。山門の「江戸三龍」の一つ「銅彫大蟠龍」は見応えがあります。泉岳寺は、慶長17年(1612)に徳川家康が門庵宗関を招いて外桜田に創建した曹洞宗の禅寺です。寛永18年(1641)、大火で焼失したため、徳川家光の命により現在の高輪の地に再建されました。境内は桜が満開を迎え、大勢の人々で賑わっていました。さらに、国道沿いの高輪一帯の鎮守府とされる高輪神社にも立ち寄りました。

「月の岬」絵

品川駅を過ぎ、第一京浜をさらに



南に下ると、八ツ山橋交差点です。絵はこの付近のものでしょうか。豪華な料理屋は品川宿の相模屋、通称「土蔵相模」を設定して描いたとされています。夜空の満月や部屋の様子から、月見の宴が催された後の情景でしょうか。左の障子に映る遊女の姿が何とも艶やかな印象で想像をかき立てられます。

「品川御殿やま」絵

新八ツ山橋東詰交差点から御殿山を望みます。広重は海側からこの山を描きました。徳川家が豊臣秀吉の側室淀君を人質にとっておく目的でこの山に御殿を建てたことから「御殿山」と呼ばれ、春には桜、秋には紅葉の名所として大変な賑わいでした。幕府が御台場建設のために削り取った荒々しい山肌がこの絵から見てとれます。

「品川すさき」絵

北品川駅を過ぎて左折すると、旧東海道である北品川本通りです。土蔵相模跡(石碑)を見て、八ツ山通りに出ます。天王洲運河に係留中の屋形船が昔の名残を感じさせます。絵はこの辺りの旧目黒川河口付近を描いたもので、中央にあるのは旧目黒川によってできた砂州で、洲崎と呼ばれていました。小さな祠は洲崎弁天、左下に見えるのは「土蔵相模」です。その後、洲崎一帯は埋め立てや開墾が進められ、開墾に携わった利田吉左衛門にちなんで利田新地と呼ばれるようになり、洲崎弁天も利田神社と名を変えて現在の品川浦公園脇に移され、今もその姿をとどめています。

「南品川鮫洲海岸」絵

品川区立台場小学校前の御殿山下台場(砲台)跡を見学し、山手通りと海岸通りが交わる新東海橋交差点の歩道橋から品川方面を眺めます。絵はもっと南の鮫洲から見て描かれています。遠くには筑波山。２隻の白い帆の船の辺りが品川とか。昔はここが海苔ヒビの連なる海上だったとは不思議な感覚です。

▲聖蹟公園

本陣跡から貴船明神社（荏原神社）

山手通りをまた逆戻りし、品川の本陣があった聖蹟公園を見学後、山手通りを渡って目黒川に沿って右手に進むと、荏原神社です。龍神で水の神である高龗神を勧請して創建。社殿の両屋根の２匹の龍の像が美しく、この龍の口から雨水を天水桶に吐き出すそうです。その後、品川区立図書館裏の薩摩藩島津家の屋敷の跡地にある稼穡稲荷とイチョウの神木を拝み、京浜急行新馬場駅で解散しました。　　参加者128人。

【取材】文：広報部会・田辺友紀子
写真：同・大橋弘依

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成30年２月22日）

すみだ郷土文化資料館を訪ねる

東京スカイツリーの足元にある「すみだ郷土文化資料館」。見上げると先端が雪雲に隠れるほどの寒い日で参加者は少ないと想像しましたが、それに反して集合場所の研修室はあふれんばかりの大盛況でした。

最初に研修室で学芸員の方から「江戸の開発と本所・向島」と題したレクチャーを受けました。墨田区は北部が向島、南部が本所です。向島は中世からあった地域ですが本所は江戸初期に整備されました。江戸は最初の100年で大きく変わりましたが、特に明暦３年(1657)の大火の後に拡大しました。この地域も例外ではありませんでした。もとは農地だった本所地域が、旗本・御家人の居住地として整備され広がっていく様子が、配布された絵図からうかがえます。本所は江戸城から約４km、徒歩で１時間の地です。お城への通勤の限界地点だったのです。本所の背後には農地が広がります。農地も田畑の増設や治水によって開発されました。明暦の大火から元禄13年(1700)までに向島地域の石高が27%も増加したのです。隅田川の五大橋が架けられた年代の一覧表もいただきました。最初に架けられた橋は千住大橋(文禄３年・1594)で両国橋は寛文元年(1661)。これを知っていると絵図を見た時、橋が架かっているかいないかで絵図の年代が分かるというご紹介がありました。

次に２階の展示室で特集展示「伝説と名所」の解説を聴くグループと、３階のひな人形の展示を見学するグループに分かれました。２階では、源頼朝の隅田川渡河を巡る伝承から名所となった寺社と、時代の移り変わりと共に変化する名所についてのお話がありました。区内には、牛島神社、隅田川神社、若宮八幡宮の３カ所に頼朝の伝説があります。橋場の渡しに橋を架けた時の古杭の残材で作ったとされる文台の展示があります。橋はいつ架けられたか分からないとされていますが、明治になって隅田川神社の神主が自分であつらえてきて、頼朝が造った橋の残材で造ったと公言したそうで、見学者の笑いを誘っていました。

３階展示室では、季節柄ひな人形が多数展示されていましたが、墨田区に所縁(ゆかり)があって寄贈されたものばかりだそうです。江戸時代から昭和に至る各時代の人形ですが、衣装やお道具が本物をそのまま小さくしたような精巧さだったり、背後の屏風が洛中洛外図を模した立派なものだったりと、大変興味深いものでした。中でも丸い顔の次郎左衛門雛は、江戸時代に大名の間で流行したそうですが、展示されているのは町方のもので大変珍しいとのことでした。芥川龍之介夫人所有のひな人形もあり、参加者一同なかなか展示室から離れがたい様子でした。

参加者46人。

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

第 18 回定期総会開催のご案内

今年の総会は亀戸駅前のカメリアホールで行います

今年も友の会定期総会の季節がやってきました。定期総会は会員が一堂に会し、過去１年間の活動を振り返るとともに本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。昨年10月から全館休館していた江戸博は常設展示室と図書室がこの４月から再開されました。しかし、特別展示室をはじめ、ホールや会議室、学習室などの再開は平成31年４月以降と予定されているため、友の会の活動は引き続き大きな影響を受けることになります。同封の議案書をご検討・ご確認をいただき、多くの会員の皆さまに平成30年度の活動への理解を深めていただけますよう、ご出席をよろしくお願いいたします。開催要領は以下の通りです。

●平成 30 年度　友の会定期総会

日時：５月24日(木)13時15分開会
会場：江東区亀戸文化センター３階　カメリアホール
　　JR 総武線・東武亀戸線「亀戸駅」
　　北口下車　徒歩２分

◇主な議案
・平成29年度事業報告ならびに収支決算報告
・平成30年度事業計画案ならびに事業予算案
・役員の補充選任

●竹内誠江戸博名誉館長の記念講演会

総会に続いて、江戸東京博物館竹内誠名誉館長による記念講演会が予定されています。演題は「西郷隆盛　因縁ばなし」です。２年ぶりとなる竹内名誉館長の講演にご期待下さい。

●会員交流会

記念講演会終了後、17時より同センター２階の大研修室において、会員交流会を開催いたします。会員同士の交流、親睦を深める良い機会ですので、ぜひご参加ください。会費は2,500円です。

えど東京一景

(10) ―東博のユリノキ―

ユリノキと聞いてもどんな木か、植物に興味がない人にとってはすぐには分からないかもしれない。でも、もしその人が美術に興味のある人なら、東京国立博物館本館の前に立つ巨木といえば「あぁ、あの大きな木のことか」と、すぐに気づくだろう。

明治14年(1881)上野公園内の旧寛永寺本坊跡地にコンドル設計の博物館(旧本館)が竣工したとき、ユリノキはここに植えられた。以来およそ140年近く、今では30mを超える巨木となって、多くの来館者を包み込むように見守り迎える東博のシンボルツリーとなった。

原産は北アメリカ中部、モクレン科の落葉高木で葉っぱの形からハンテンボク、ヤッコダコノキ、グンバイノキとも呼ばれる。明治7、8年ころに渡来した30粒の種子から育った苗木のうちの1本が東博に植えられた。ユリノキだからユリのような花が咲くかと思いきや、実は英名のチューリップツリーの方がすんなりとくる形をしている。淡い黄緑色の6枚の花びらがチューリップのように鐘形に開き、花びらの裾の方にオレンジ色のまだら模様が太い線となってぐるりと波形に入っている。花そのものは直径5、6cmの大きさだが、街路樹のユリノキは高く茂った葉っぱに隠れて目立たず、なかなか見つけられない。しかし、のびのび育った東博のユリノキは下の枝にもたくさんの花を付け、間近に観察することができる。

花期は4月下旬から5月の初め。ユリノキは花一つで小さじ1杯の良質な蜜を分泌するという。この量は、1匹のミツバチが一生のうちに採取する量に匹敵する。ユリノキは優れた蜜源植物なのだ。

東洋館のバルコニーからはユリノキの全体がよく見える。花の時期だけでなく、葉を落とし、枯れた果実がまばらに残った風情を楽しむのもいいかもしれない。

【取材】文：広報部会・中村貞子／イラスト：同・福島信一

江戸博クリップ

「派遣の仕事から美術館・博物館の仕事へ」

管理課管理係　北條和子（ほうじょう　たかこ）

私は、社会人としてスタートしてからこれまで、10社以上の企業で働いてきましたが、派遣社員としての勤務がほとんどでした。たくさんの企業を知りたい、人間関係に気を遣わず、仕事だけに集中できるというのが主な理由でした。

こうした流れの中で派遣会社に紹介されて、東京都美術館(以下「都美」)に勤務し、その後、常勤契約職員となり、平成22年には固有職員に採用され、平成28年7月から江戸東京博物館(以下「江戸博」)で勤務しております。

都美と江戸博は、私にとって文字通り人生の集大成となる職場となりました。美術館や博物館は、芸術文化を通じて人々の心に直接働きかけ、そして、来館者は興味や関心を喚起される。文化施設は、人々に心の豊かさや感動を与えることができる、そんな素晴らしい職場だと思います。特に江戸博の魅力の一つは、一過性の展示だけでなく、そこに展示された一つ一つの資料が江戸東京の文化を語りかけてくるような雰囲気を感じさせてくれることだと思います。

私が担当する館の維持管理業務は本当に誇りある仕事で、日々つつがなく運営されているのも館の運営を支える人たちがそれぞれの立場での責務を全うし、努力している成果だと思っています。私の業務はその中の一端かもしれませんが、江戸博に来館されるお客様の顔をいつも意識しながら、全力で取り組むよう心がけ、日々努力していきたいと考えています。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊲

[医光山円照寺から明王山宝仙寺]

宝仙寺の石臼塚

今回は新宿区と中野区の境を流れる神田川周辺を巡ります。歩いたのはあちこちから梅便りが届く２月下旬でした。

医光山円照寺から鎧明神祠

ＪＲ中央線東中野駅下車。東口から新開橋で神田川を渡って進むと、左手に医光山円照寺があります。当地は平安時代の地頭柏木右衛門の館跡であったと伝えられており、その由来に基づく「右衛門桜」の３代目が本堂前に植えられています。桜の開花はまだですが、隣ではしだれ梅がピンクの花を咲かせていました。本堂ではガラス戸越しに行基作と伝わる薬師如来像を見ることができます。

前の通りの少し先を左に入ると、淀橋第四小学校の隣に鎧明神祠（現鎧神社）があります。社名の由来は日本武尊東征の際に甲冑を納めたとも、藤原秀郷により討たれた平将門の鎧を埋めたとも伝わります。境内の天神社には享保６年（1721）奉納の珍しい「狛犬型庚申塔」があり、どことなくユーモラスな表情が気に入りました。

淀橋から十二所権現社

南側の大久保通りに出て右方向に進み、末広橋で再び神田川を渡ると、橋のたもとに「神田川」の歌碑が立っています。喜多條忠作詞・南こうせつ作曲の名曲で、懐かしさを覚えました。ここから川沿いの遊歩道「神田川四季の道」を南に歩いて行くと、青梅街道が通る淀橋が見えてきます。挿絵の「淀橋水車」に描かれているように、江戸時代には神田上水に架かる大橋と支流に架かる小橋の二つの橋があり、水車ではそば粉を石臼でひいていました。橋名の由来は徳川家光（もしくは吉宗）が山城の淀川になぞらえたとも、豊島郡と多摩郡の余戸（小集落）を移住させた村にあったため「余戸橋」と呼ばれたともいわれます。また旧名は「面影の橋」「姿見ずの橋」などといわれており、これは室町時代に中野長者と呼ばれた鈴木九郎の伝説に因むものです。

青梅街道を渡って十二社通りを進むと、熊野神社前交番の先に十二所権現社（現熊野神社）へ上がる階段があります。応永年間（1394～1428）に鈴木九郎が故郷の紀州熊野三山より十二所権現を勧請したと伝わります。江戸時代には池や滝のある景勝地「十二社」として賑わいましたが、現在その面影は全くありません。境内には「十二社の碑」や「大田南畝の水鉢」があり、拝殿内には「七人役者図絵馬」と「式三番奉納額」が掲げられています。

▲長谷川雪旦：淀橋水車

多宝山成願禅寺から明王山宝仙寺

十二所通りを戻って熊野神社前交差点の次の信号を左に入ると、うねうねと曲がりくねった道が続きます。道なりに歩いていくと途中に石橋の欄干の一部が残されており、両側は暗渠になっていました。説明板によれば昭和７年（1932）に完成した柳橋の跡で、同38年に暗渠化されたそうです。後で確認すると、江戸後期の地図の同じ場所に橋と川が描かれていました。さらに歩くと神田川に突き当たり、左に進むと山手通りの所に長者橋が架かっています。この通りができた時に造られた新しい橋ですが、名称は中野長者に因んでいます。

橋を渡って最初の信号で横断すると、出家して正蓮と号した鈴木九郎が永享10年（1438）に創建した多宝山成願禅寺があります。元は正観寺という名で十二所権現社の敷地内にありましたが、寛永５年（1628）に長者屋敷跡の当地へ移転して改称しています。紅白の梅に彩られた楼閣風の山門を入ると正面が墓地で、鈴木九郎長者の墓（図会では中野長者正蓮の墳墓）や蓮池藩鍋島家の墓所があります。境内には多くの建物が並んでいますが、特に印象的だったのが円通閣（百観音堂）で、西国三十三ヶ所・坂東三十三ヶ所・秩父三十四ヶ所の観音像の写しがずらりと並ぶ様は荘厳でした。

山手通りを北に進み、東京メトロ丸ノ内線中野坂上駅がある交差点を渡って左に行くと、通りの右奥に明王山宝仙寺の仁王門が見えてきます。享保13年徳川吉宗に献上されたベトナム象が浜御殿で飼育された後、中野村の百姓に払い下げられて寛保２年（1742）に病死、その枯骨が宝仙寺で見世物になりました。現在は頭骨と牙が寺宝として本堂に納められていますが、公開はされていません。境内で特に目を引くのが「石臼塚」です。かつてそば粉をひくために用いられた石臼を供養するため、昭和初期に第50世住職が立てたもので、放置されていた石臼を富士塚のように積み上げています。隣に建つ三重塔は平成７年の再建で、元の塔は寛永13年飛地に建立され昭和20年の戦災で焼失しています。これが図会に書かれた「中野の七塔」の一つと思われます。寺の脇から山手通りへ出て向かいの中野第十中学校がかつての飛地で、塔山と呼ばれていました。学校脇の片隅には「宝仙寺三重塔記念碑」が金網に囲まれてひっそりと立っていました。

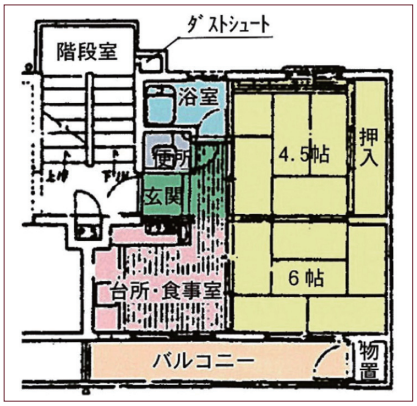
【取材】歩いた人（文・写真とも）：
広報部会・菊池真一
（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

団地と電化生活

東京ゾーンの９番目は「高度経済成長期の東京」を紹介しています。その中の「団地と電化生活」の展示では、ひばりが丘団地の２ＤＫの一室(部分)の実物大模型を使い、昭和37年(1962)ごろの生活を再現しています。

団地のはじまり

昭和23年、東京に鉄筋コンクリート造の集合住宅「都営高輪アパート」が建設されました。昭和30年には日本住宅公団(現 UR 都市機構)が設立されました。公団第１号の団地は翌31年３月に大阪府堺市に完成した金岡団地で、900戸のすべてが２ＤＫでした。このＤＫを意味するダイニングキッチンが日本に登場した第１号でもありました。続いて福岡市の曙団地、東京・三鷹市の牟礼(むれ)団地、葛飾区の青戸団地などが完成しました。国家公務員の初任給が8,700円のころ、家賃は約40㎡の住宅で月4,600円と家賃水準が高く「高嶺の花」といわれていました。



▲当時の一般的な間取り図（２ＤＫ）

ひばりが丘団地は、北多摩郡田無町、保谷町(両町は現西東京市)、久留米町(現東久留米市)の三町にまたがる場所に建設された集合住宅地です。全戸数2714戸は全て賃貸で、昭和34年４月から入居が始まりました。間取りは、１ＤＫから４Ｋまでさまざまなタイプがあり、最も多かったのは２ＤＫです。各住戸の玄関にはシリンダー錠付のドアが取り付けられ、室内には浴室も設けられました。当時、浴室はおろかトイレや台所までをも共用しなければならない共同住宅が多かった状況下にあって、これらの設備はプライバシーを確保し、マイホームの概念を確立させるものとなりました。

住居の設備

展示している一室は、２ＤＫ(当時の一般的な間取り図を参照)で、和室の一部が省略されて造られています。玄関を入ると右側に靴箱がありますが、よく見るとダイニングキッチン側に出っ張るように置かれています。ダイニングキッチン側から見ると靴箱の上に棚があり、スペースを有効に活用していることが分かります。

ダイニングキッチンにはステンレス製の流し台があります。このステンレス流し台は、昭和31年に公団晴海団地で採用されたことから普及が始まりました。流し台の上にガスコンロがあります。乾電池による自動点火装置を備えたタイプのガスコンロは、昭和34年に商品化されていました。

昭和34年に入居が始まったひばりが丘団地は、トイレが和式水洗便器になっています。同年に日本住宅公団が腰掛水洗便器を公団住宅の標準仕様にしたのをきっかけに、洋式トイレの普及が進みました。トイレの隣のバスルームには木桶風呂が見えます。ＦＲＰ(ガラス繊維強化プラスチック)、ホーロー、ステンレスなどで作られた浴槽は、昭和40年代に普及し始めました。

▲玄関付近

電化生活

電化製品を見てみると、和室に白黒テレビ、ダイニングキッチンに電気冷蔵庫、ベランダ(バルコニー)に電気洗濯機があります。この３点は電化製品の「三種の神器」といわれていました。電気洗濯機は脱水機がローラー式のものですが、昭和35年には遠心脱水機付２槽式洗濯機が発売されています。他にも電気炊飯器、トースター、ジューサー、トランジスタラジオなどもあります。蛍光灯も使われています。昭和30年ごろから環形蛍光ランプが家庭用として急速に普及し始めました。

▲ダイニングキッチン

展示パネル(団地生活における電化製品の普及率)を見ると、昭和35年の団地世帯と東京都区部の全世帯を比較して電化製品の普及率が紹介されています。団地での普及率は、電気洗濯機76％(区部49.2％)、電気炊飯器56％(区部25.1％)、電気冷蔵庫20.5％(区部13.7％)、白黒テレビ61.1％(区部60.6％)でした。団地世帯の方が早く電化製品を取り入れているのが分かります。

参考資料：
『江戸東京博物館　常設展示総合図録』、『江戸東京博物館　常設展示図録(模型編)　模型で見る江戸東京』、ひばりが丘団地再生事業パンフレット(ＵＲ都市機構)

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

催事案内

古文書講座

◆5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。受講票を持参の上必ず受講してください。また参加費は釣り銭のないようにお支払いください。

◆入門編　講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：5／16(水)、6／13(水)、7／4(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5／23(水)、6／20(水)、7／11(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：5／26(土)、6／23(土)、7／21(土)

- 時間：各講座とも　午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも飯田橋・新陽ビル4階
  「リロの会議室　会議室A」
- 参加費：各講座とも全3回2,400円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会セミナー

第180回「朝鮮通信使と雨森芳洲の功績と思い」

講師　桐原総一さん(日本エコミュージアム研究会員)

◆古代から江戸時代まで、日本と朝鮮は様々な形で交流を深めてきました。その架け橋になった多くの人物の中でも、江戸時代に対馬藩朝鮮方佐役として李氏朝鮮との通好実務に携わった人物が、雨森芳洲です。特に元禄15年に朝鮮の釜山へ渡り、翌16年から18年にかけて釜山の倭館に滞在し、正徳元年と享保4年に、朝鮮通信使の江戸行きに随行し、その手腕を発揮しました。彼の偉大な点は、単なる通好実務や、朝鮮語に堪能だったというだけではなく朝鮮の風俗習慣を深く理解し、その違いを尊重するという理念を持っていたことです。そして彼が「書き残した書籍」に接しながら、「朝鮮通信使の行程」を辿り、映像も楽しみつつ、雨森芳洲に対する理解を深めていただければと思います。

◆講師略歴：きりはら・そういち
昭和26年(1951)生れ。昭和51年国学院大学史学科卒。
職歴：千葉県教諭職を経て博物館学など各種講師を務める。
所属：全日本博物館学会、日本エコミュージアム研究会。
著書：『学校博物館百景』崙書房、2006年出版。共著：『遣唐留史・井真成の墓誌』ミネルヴァ書房2009年。

- 開催日時：6月22日(金)　14時～15時30分
- 申込締切：6月7日(木)必着
- 会場：みどりコミュニティセンター4・5階多目的ホール
  東京都墨田区緑3－7－3　JR「両国」駅東口15分同駅西口20分　都営大江戸線「両国」駅10分
  会場案内図等の詳細は、後日、参加者に送付します。
- 定員：200人(先着順)同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

見学会

「赤穂四十七士の凱旋コースを歩く」(前半)

◆今回は、今までの見学会とは少々趣が異なり、歩くことを中心に実施します。吉良上野介の首を高輪泉岳寺の主君の墓前に手向けるため、討ち入りに成功した赤穂義士たちは本所から全行程12kmに及ぶ道のりを凱旋しました。当時とは道や橋の位置がずれているため、義士と全く同じ道というわけにはいきませんが、おおよそのルートは今もたどることができます。今回(前半)は両国から築地を経由して東銀座までを歩きます。所要時間は約2時間半強の行程です。解散は東京メトロ日比谷線東銀座駅、都営浅草線東銀座駅で解散となります。後半は12月の予定です。

- 開催日：6月10日(日)受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時30分　　受付終了：13時
- 集合場所：JR総武線「両国」駅(東口側)
- 申込締切：5月31日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】林　正信・山本　隆(事業部会)

企画展のご案内

●企画展　NHKスペシャル関連企画「大江戸」展

会期残り僅か お見逃しなく！

会　期：4月1日(日)～5月13日(日)
休館日：5月7日(月)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

催事のお申込方法

◆**普通はがき(62円)**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてから ご参加ください。

会報＜えど友＞第103号
平成30年5月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：早川良躬(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話03-3626-9910